

渡辺照宏著

仏教

第二版



岩波新書

915



渡辺照宏著

仙 教

第二版

岩波新書

915

渡辺照宏

1907年東京に生まれる

1930年東京大学文学部インド哲学科卒業

専攻—インド哲学、仏教

著書—「日本の仏教」「死後の世界」「外国語の
学び方」「お経の話」(以上岩波新書)
「日本仏教のこころ」「仏教のあゆみ」
「新釈尊伝」など

仏 教 第二版

岩波新書(青版) 915

1974年12月20日 第1刷発行 ©



著 者 ^{わた}渡 ^{なべ}辺 ^{しょう}照 ^{こう}宏

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区改代町24
印刷者 田 中 昭 三

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・永井製本

まえがき

仏教とは何か、という問いに答えるのが本書の仕事である。仏教について語るべきことはあまりにも多いから、答え方もさまざまであってよいが、あらたに執筆するにあたって「岩波新書」の読者を予想して次のような方針を立てた。

本書を通読すれば仏教についてひととおり基本的な知識が得られるように工夫する。どうしても必要なテーマを落とさないように注意する。叙述をできるだけ平易にして、予備知識なしに読めるように気をつける。それと同時に、内容については専門学者の批判に耐え得る水準を保ち、学問的に責任の持てることのみしか書かない。仏教において人生の指針を求める人びとの手引ともなる。学生や研究者の参考書としても役に立つ。

ところで、過去二千年以上にわたってアジアの広い地域で行なわれ、現在も生きた宗教である仏教の種々相を満遍なく述べることは不可能であるし、また、その中の特定の立ち場を擁護することも許されない。どうしても歴史に遡って原点から出発しなければならない。そのためには、まず常識的な既成概念の批判から始め、研究方法を吟味しなければならない。そのうえ

で、仏教を生んだインドの精神的風土を考える。これを前提として、仏陀の生涯を概観し、同時に仏教の基本的諸問題を考える。そのうえで仏陀の弟子たち、およびその後継者たちの生活と考え方とを述べる。弟子の中でも、世を捨ててもっぱら修行にはげむ出家者と、仏教を日常生活の指針とする在家信者との区別を明らかにする。このようにして、インドの仏教の歴史に即して、この宗教の重要問題をひとつとおり説明する。そのあいだに中国や日本の仏教の問題点にも触れる。

そういうつもりで本書ぜんたいを一貫した読み物として一気に書き上げた。だから、はじめからこの順序で通読されることが望ましい。ただし、初めて読むときは細かい活字で印刷した*印の注記は飛ばしてもよい。また、たとえば「釈迦牟尼」「愛別離苦」などのように角型括弧でくくった言葉は、漢訳仏典の用語である。インドの原語を示すにはカタカナとローマ字とを併用した。その大部分はサンスクリット語であるが、パーリ語もいくらかある。現代インドの地名の表記は必ずしも厳密を期しがたい。

仏教用語を現代日本語の口語で言いかえることには——実は私も試みているのだが——限度があり、誤解を生ずるおそれもある。自然科学の術語のばあいと同様である。ある程度まではインドの原語や漢訳の成語を利用した方が便利でもある。本書を読む際に少しずつでも気をつ

けておけば、他日、聖典に親しむためにも都合がよいと思う。

本書に引用した聖典はすべて第一資料から直接翻訳した。サンスクリット語またはパーリ語原典の存在するものはそれにより、原典が散佚して現存しないものについては、漢訳およびチベット語訳の両方を読んでから訳した。また、インドに根拠のない文献は原則として引用しなかった。

本書の初版は一九五六年に刊行されたが、それ以来、学界は著しく進歩した。新しい研究（主としてヨーロッパ）には目ざましいものがあるし、原典の出版、翻刻もさかんで、隔世の感がある。この趨勢に応じて初版を廃棄し、新しい構想のもとに第二版を起稿し、ここに脱稿した。題名は同じであるが、内容はすべて書き改めた。

本書は『お経の話』（岩波新書）に接続する。両書を比較参照して頂きたい。参考文献として同書に挙げたものの他、次の二点を追加しておく。これらの書には詳しい文献表があるので研究者には便利である。

D. SCHLINGLOFF, *Die Religion des Buddhismus* (Sammlung Götschen), Berlin 1963.

A. BAREAU, *Der indische Buddhismus* ("Die Religionen Indiens" III), Stuttgart 1964.

前回と同じく岩波書店編集部の岩崎勝海氏にたいそうお世話になったことを感謝する。

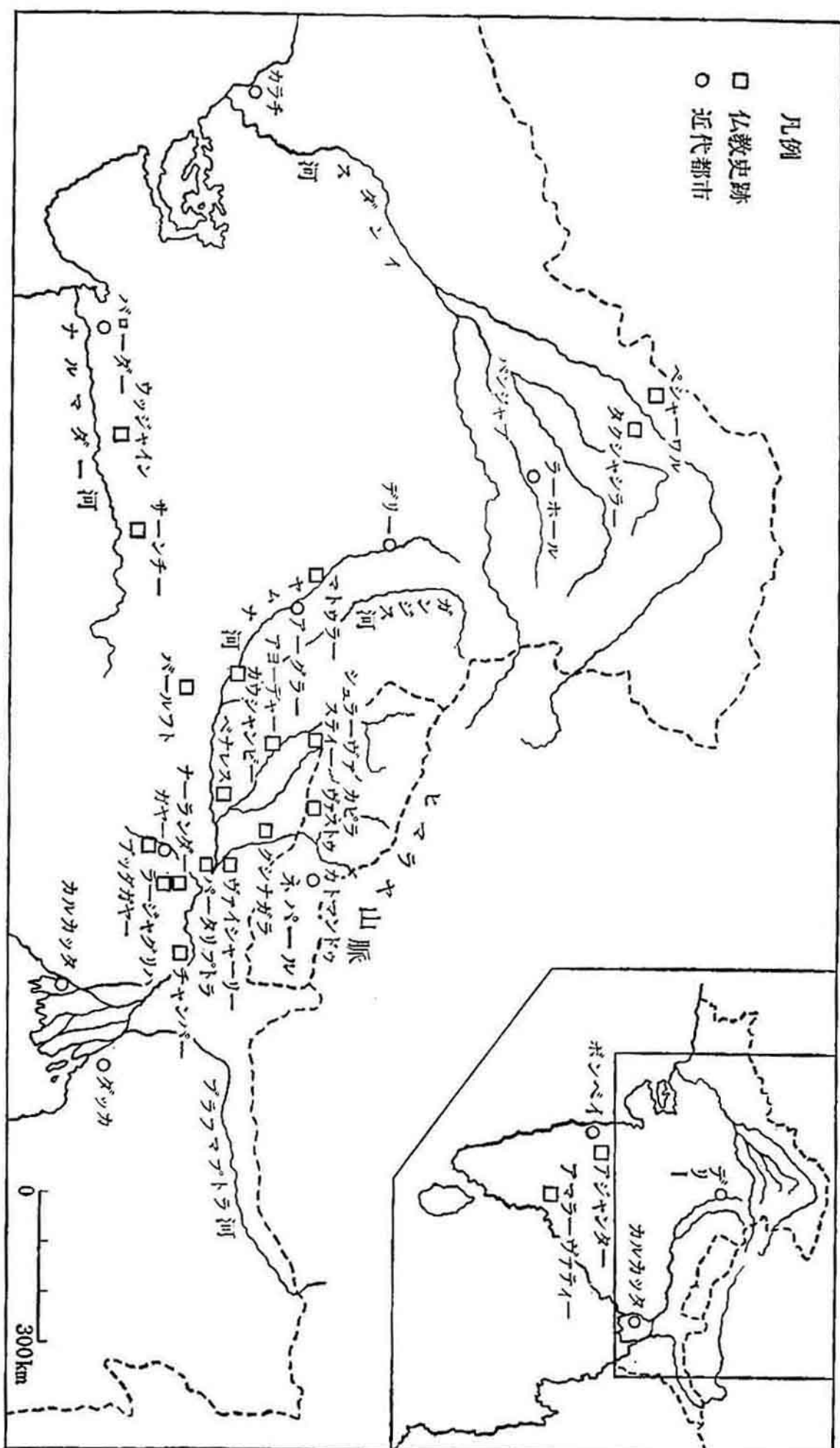
一九七四年十一月

渡辺照宏

ーパの建立(二九〇)	ストゥーパの寄進者たち(二九二)	ストゥーパ礼
拝の問題点(二九二)	法華經のストゥーパ信仰(二九三)	大乘とストゥ
ーパ(二九四)	仏陀の本体(二九四)	ヴァイローチャナ仏陀(二九六)
大	日如来(二九六)	ボサツたち(二九六)
明王(二九六)	天部(三〇〇)	マンダ
ラの世界(三〇〇)	三密のヨーガ(三〇〇)	石は沈む(三〇二)
船に乗せ	る(三〇二)	廻向(三〇三)
ボサツ道の極致(三〇四)		

凡例

- 仏教史跡
- 近代都市



インド仏教史跡地図

目次

まえがき

I 仏教へのアプローチ

日本人と仏教(二) 仏教的遺産(三) 日本語の中の仏教語(三) 仏陀と成仏(三) 往生(六) 念仏(六) 中国仏教の成立(七) 中国における西域仏教(二〇) インドから来た僧侶たち(二二) 玄奘(二三) プニョーダヤ(二四) アモーガヴァジュラ(二六) 塔(二七) ヨーロッパにおけるインド研究の開始(三〇) パーリ語仏典の研究(三三) チベット仏教の研究(三五) サンスクリット語仏典の発見(三七) 北方仏教の研究(三〇) 西域の再発見(三三) 仏教研究の新方向(三六) 日本における仏教研究(三九) 本書の歴史的立場(四二)

II 仏陀とは何か

仏陀の宗教(四四) 仏陀が説いた宗教(四六) 仏陀を信仰する宗教(四八) 仏陀についての考察(五〇)

III 仏陀以前のインド 五

インドの風土(五) アーリア族の優勢(五) 非アーリアの諸民族
(五) インダス文明(五) ドラヴィダ文明(六) モンゴル系(六)
ヴェーダの宗教(六) バラモン教(六) ウパニシャッドの思想
(六) 出家修行者の群(六) 二大史詩(六) ジナ教(七) アー
ーヴィカ教(七) 仏教の立場(七)

IV 仏陀の生涯 七

仏陀の伝記(七) ボサツの誕生(七) 誕生地の遺跡(八) ボサツ
の母(八) 予言(八) 青年時代(八) 四門出遊(八) 出家(八)
苦行(八) 菩提樹(八) マーラとの闘い(八) 成道(八) 世尊
(九) 独覺(九) 梵天の勧請(九) 鹿野苑(九) 最初の説法(九)
中道(九) 四つの聖なる真理(九) 苦悩について(九) 苦悩の起
原(九) 苦悩の克服とそれを実現するための道(九) 仏陀となっ
たという宣言(一〇) 教団の成立(一〇) 三大弟子(一〇) マガダ
国(一〇) カピラヴァストウ(一〇) デーヴァダッタ(一〇) 尼僧
のはじまり(一〇) 祇園精舎(一〇) 鹿子母講堂(一〇) プラセー

V

仏陀の弟子たち

——出家と在家——

.....三

ナジット王(二〇九) カウシャンビー(二一〇) 西端と東端(二二) ヴ
アイシャーリー(二三) 布教旅行(二三) ネハン経(二四) 最後の
旅(二五) 生命力の放棄(二六) 入滅の宣言(二七) 最後の供養
(二八) クシナガラ(二九)

出家と在家(二三) 出家修行者の優位(二三) 出家教団(二三) サ
ンガ(二四) 戒律の条項(二五) 反省の日(二七) 布薩(二七) 雨季
(二八) 祝祭日(二八) 寺院(二九) ビクシュの衣食(三〇) 教団の
運営(二三) 在家信者(二三) 在家のための説法(二四) 平凡な在
家信者(二六) すぐれた在家信者たち(二七) 富豪ウグラ(二七)
富豪ハスタカ(二九) プールナの僻地布教(二四〇) 在家仏教の意義
(二四二)

VI

聖典の成立

——アショーク王の前と後——

.....一四

聖典の伝承(二四) ヴァイシャーリー会議(二四) 聖典の編集(二四)

アシヨーカ王当時の仏教(二四七) アシヨーカ王の入信(二四八) アシ
ヨーカ王の法(二四九) アシヨーカ王と仏教(二五〇) ラーフラへの教
誡(二五一) 聖典成立以前の仏教(二五二) 多界経と六界経(二五三) 四
摂事(二五七) 四無量(二五八) 慈愛の問題(二六〇)

VII 仏陀の理想をめざして

——ボサツの道——

ジャータカ物語(二六三) ジャータカのテーマ(二六五) パーラミター
(二六六) 六パーラミター(二六八) ボサツの拡大解釈(二六九) ボサツ
の道(二七〇) ヨーガ(二七二) ヨーガと三界(二七三) ヨーガと無常観
(二七四) 大乘の静慮(二七五) 静慮パーラミター(二七五) ヨーガの実
踐者たち(二七六) 智慧のパーラミター(二七九) 般若經典(二八〇) 般
若と方便(二八二) 中観派(二八二) ボサツの学芸(二八三) 不住生死涅槃
(二八三) 発菩提心(二八四) 第三の道(二八五)

VIII 仏陀の慈悲を求めて

——信仰の道——

帰依(二八七) 帰依のいろいろ(二八八) 三宝への帰依(二八九) ストウ

I 仏教へのアプローチ

日本人と
仏教

日本人の生活の中に仏教はどのように生きているのであろうか。あるいはむしろ、いったい今でも生きているのかどうか、と問いなおすべきかも知れない。もし肯定的に答えるとすれば、大多数の日本人が死ねば仏教の儀礼によって葬られ、遺族が定期的に墓参し法事を営むという事実を第一に指摘すべきであろう。あるいはまた、大部分の家庭に仏壇が設けられ、必要があればいつでも百貨店でそれを購入することができる、というのも事実である。さらにまた、仏教に関する単行本や雑誌が多く刊行されて、相当に売れているし、寺院および寺院以外における説教や講演の集会も盛んである。また、坐禅やその他の実践に参加する人びともいる。

これに反して、仏教は現代の日本人の生活の中に生かされてはいない、という見方も不可能ではない。たとえば日本には仏教の立場に立つ政党というものはない。特定の宗教団体を背景とする政党があるとしても、実際の政治活動からみて、仏教の理想を実現するための政党であ

とは思われない。それ以外の仏教団体でも組織的に票を集めれば政治的な一勢力となり得るはずではあるが、現実には仏教を政治に生かすという試みはない。

言論界でも同じで、一流の新聞、雑誌における宗教の扱い方にもそれが現われている。東京で発行されている大新聞のうち二つは現在、宗教欄を持たず、仏教が記事になることも稀である。代表的な週刊誌、月刊誌も同様である。欧米の一般新聞雑誌におけるキリスト教の扱い方と比較すると、わが国で仏教が公の場において冷遇されていることが明らかであろう。

ところがそれでいて個人的に見る場合には日本の政治家も、実業家も、評論家、学者、芸術家なども——若干の例外を除けば——大体において一般庶民の大多数と同様に自宅に仏壇をまつり、寺院や墓地に詣でるという習慣を守っているし、中には仏教書に親しみ、僧侶に教えを請うものも決して稀ではない。要するに、個人的ないし家庭生活においては仏教は実際に重要な地位を占めているが、公的な場においては軽視されているのである。

仏教的遺産

観光という面から見ても、およそその対象の過半数は仏教と関係がある。年中行事、建造物、美術工芸品など大小、有形無形の文化財は信仰の対象である以上に、教養ないし好奇心という点からも内外の客を惹きつけるのに十分である。それらの存在が現代の日本人の精神生活に対してどれだけの影響を及ぼしているか、という問題を一応、度外視す

るとしても、過去において日本人の精神形成に仏教が重要な役割を果たしたことは明白である。また、日本語の語彙の中には外来語が多いが、中でも仏教起原のものが著しい。現在、よく口にするものだけでも、“四苦八苦” “地獄” “餓鬼” “畜生” “有頂天” “金輪際” などは仏教の術語であり、“遮二無二” “滅相” “滅法” などの形容詞・副詞も仏教起原である。“娑婆” “那落” “阿鼻” “阿修羅” などはサンスクリット語(saṃhā, narakā, avīci, asura)の音写である。“魔(または摩)羅(māra)”は修行者を誘惑する悪魔の名であるが、奈良時代の仏教寺院では男根の陰語として用いられ、『日本霊異記』ではこの語に“閼”という字をあてている。そしてこの語は現在でもなおその意味で用いられている。

この最後の例を見てもわかるように、仏教起原の語でも日本語としてはまったく別の意味で用いられていることも多い。たとえば“般若”という語は誰でも知っているが、これが仏教哲学の重要な用語であることを知っているものは少ない。

仏陀と成仏

仏教用語が本来の意味を離れてまったく別の意味で慣用されている重大な例として“仏陀”という語を考えてみよう。

“仏陀”はサンスクリット語の“ブツダ”(buddha)を漢字で音写したもので、ただ“仏”とも記し、日本語では“ホトケ”と読んでいる。原語は“目ざめた者、最高の真理を悟った者”と

いう意味で、完全な人格者のことである。このような理想的人物がこの世に出現することはきわめて稀であるという。大海に住む盲亀が特定の浮木に邂逅する確率に比するほど、われわれが仏陀にまみえる好機はめったに与えられない。われわれの住む世界に生まれて仏陀となった人間は釈迦牟尼ただひとりあるのみである。“仏陀となる”すなわち“成仏する”ことは仏教の理想ではあるが、それを実現することはきわめて困難である。

仏教成立当時のインドの人生観によれば、人間はすべて死によって消滅するものではなくて、現在の生涯の総決算の結果として、また生まれかわって次の生涯を開始する。かくして生涯の連続は無限につづく。これを“輪廻”と名づける。この輪廻から脱出するために宗教の理論と実践とが必要になる。輪廻から脱出することを“解脱”と名づけ、解脱した人はもはや再生することがない。

仏教もまた当時のインドの諸宗教と同じく輪廻説を前提とし、解脱を目標とする。仏陀はこの世においてすでに解脱^{*}しているから死後に再生することはない。

* 輪廻と解脱とは仏教の内部でもさまざまに解釈されるが、仏陀が輪廻を超越して解脱しているという点では異論がない。

ところが現在の日本語の用例から見ると、ふつうに“仏”という語は死者をさし、死者の霊